



川口栄男・上ノ菌雅子：福岡周辺海藻採集地案内

長崎大学の飯間氏による長崎周辺の採集地案内(本誌44巻1号)の続編ということで、本稿では福岡周辺の採集地を紹介する。

福岡県は九州北岸の筑前海、有明海、および瀬戸内海側の豊前海の三つの海に囲まれているが、ここでは筆者らが比較的好く調査を行っている九州北岸の採集地に絞ることとする(図1)。いずれの採集地とも九州大学のある福岡市東部より車で1時間もあれば行ける所であるが、注意すべき点は、日本海側といっても九州北岸まで来ると東シナ海の影響が強くなり、潮位差がかなり大きくなることである。春の大潮時には干満の差が2mを越えるので、特に磯採集を行う場合は事前に潮位の確認が必要である。

1. 津屋崎海岸(九大箱崎キャンパスより車で約40分、私鉄電車で約1時間)

福岡市の北に位置する津屋崎町には九大農学部の付属水産実験所があり(図2)、主に有用魚種の増養殖に関連した研究が行われている。実験所は学外からの宿泊利用も可能なので海藻の研究者も大いに利用されたいと思う。

水産実験所から徒歩で20-30分のところに海藻類が豊富に生育する岩場がある(図3, 4)。この津屋崎海岸は水産学科の3年生が毎年3月に5日間程この実験所に泊りこんで海藻の実習を行うことや、筆者らの研究室の主要フィールドの一つということもあって、海藻類や魚類に関して福岡周辺では最もよく調べられている場所である。残念ながら海藻相に関して公表された資料は今の所ないが、近年、九州国際空港の有力候補地として津屋崎沖が挙げられていることもあり、筆者らの教室に蓄積されているデータを近い将来何らかの形で公表する必要があると考えている。

九州北岸は基本的に砂浜で、その所々に岩場が点在する。津屋崎海岸も大きな砂浜から岬状に岩場が突

出する地形となっている。筆者らがよく調査を行う恋の浦やソネの鼻は、比較的平坦に岩盤がひろがり採集しやすいところである。毎年の海藻実習やその他の調査で得られた資料に基づき以下に代表的な出現種をまとめる。

緑藻類：ヒトエグサ、アナアオサ、ウスバアオノリを含むアオノリ類、シオグサ類、ミル、ハネモ、フサイワツタなど。

褐藻類：シオミドロ類、クロガシラ類、アミジグサ、フクリンアミジ、コモングサ、シワヤハズ、ヘラヤハズ、ウミウチワ、ウスユキウチワ、コナウミウチワ、シワノカワ、ネバリモ、クロモ、フトモズク、モズク、イシゲ、イロロ、ケウルシグサ、ハバモドキ、イワヒゲ、フクロノリ、カヤモノリ、ワタモ、カゴメノリ、ハバノリ、クロメ、アラメ、ワカメ、ジョロモク、ヒジキ、ヤツタモク、フシスジモク、トゲモク、イソモク、タマハハキモク、アカモク、ノコギリモク、ヨレモク、ホンダワラ、ウミトラノオ、アキヨレモク、マメタワラ、ヤナギモク、ナラサモ、エゾノネジモク、スギモクなど。この他に打ち上げで、ケヤリ、タバコグサなども稀に得られる。

紅藻類：アマノリ類、カモガシラノリ、ベニモズク、カギノリ、マクサ、オバクサ、ヒメテングサ、ヨレクサ、イソウメモドキ、ナミノハナ、ウスカワカニノテ、ビリヒバ、ムカデノリ、キョウノヒモ、サクラノリ、フダラク、マツノリ、ハナフノリ、フクロフノリ、ユカリ、ホソバミリン、イバラノリ、カギイバラノリ、オゴノリ、カバノリ、オキツノリ、ツノマタ、ワツナギソウ、フシツナギ、コスジフシツナギ、タオヤギソウ、エゴノリ、ケイギス、ハネイギス、カギウスバノリ、アヤニシキ、ダジア類、ショウジョウケノリを含むイトグサ類、ヤナギノリ、ユナ、コザネモ、イソムラサキ、シマダジア、クロソゾ、ミツデソゾ、マギレソゾ、コブソゾ、ハネソゾ、ジャバラノリ、イトフジマツなど。打ち上げではヒビロード、エナシカリメニア、ユルジギヌ、トサカノリ、ミリンなど。

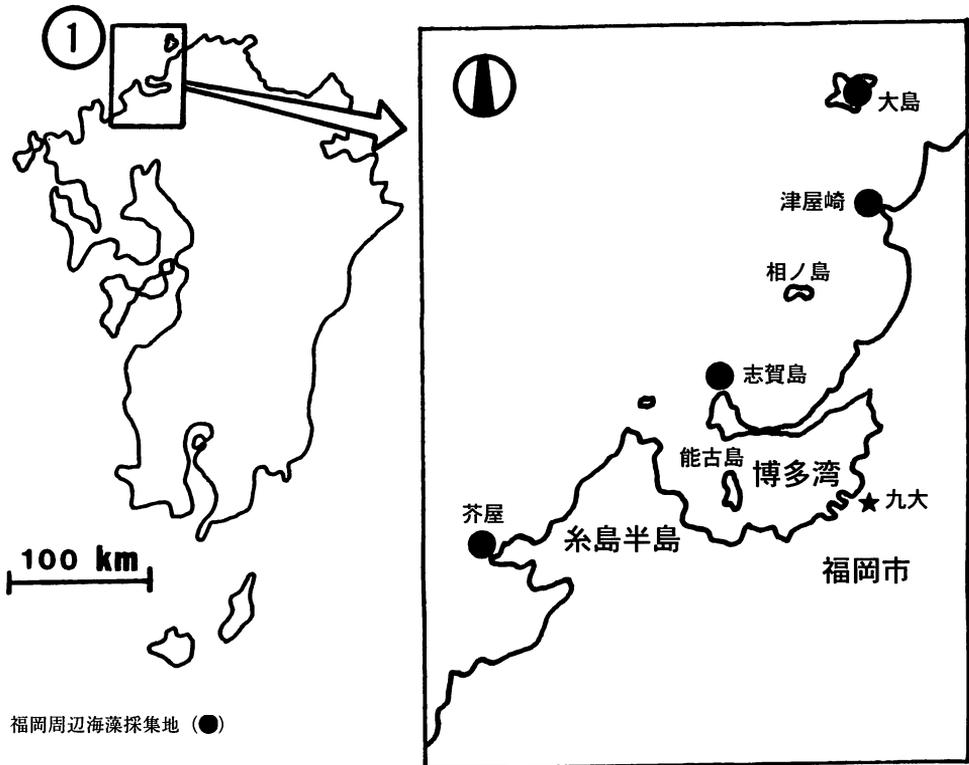


図1. 福岡周辺海藻採集地 (●)

2. 博多湾周辺 (車で30-40分、バスで1時間程度)

博多湾周辺で海藻を採集する場合、湾内と湾外ではかなり様相が異なることをまず言っておきたい。

博多湾の外側になる志賀島の北部から東部にかけては連続した岩礁地帯で、ほぼ津屋崎海岸と同様の藻類植生がみられる。採集には最北部の勝馬付近(図5)が大きな平磯となっており最適であろう。

一方、大都市福岡をひかえる半閉鎖的な博多湾内はかなり富栄養化していると考えられる。というのも、近年、湾最奥部の和白周辺ではアオサ類の増殖が顕著にみられ、それらが打ち上げられ腐敗することにより、景観的にも衛生的にも問題が生じてきているからである。筆者らの教室では、ここ数年来、アオサ類を中心に博多湾における海藻類の生態調査に着手しており、昨年是一年間にわたり植生の調査も行った。その結果の詳細は今年中に公表する予定であるが、概略を述べれば、湾全体では約100種の付着藻類の生育が確認され、湾口に近い部分では種数が比較的多いものの(約70種)、湾中央部では半減し(ほぼ30種)、湾奥では専らアオサ類のみが優占した。この生育種数の違いは地形的な差というより富栄養化との関連が強いと筆

者らは考えている。ちなみに、福岡市環境局環境保全部が発行している「平成7年版福岡市の環境」によれば、博多湾東部海域でのCOD値は周年2.0-6.0mg/lの範囲にあり、環境目標(B類型、COD75% 3mg/l以下)の達成に至っていないとしている。博多湾藻類植生調査で明らかになったもう一つの点は、湾内では大型褐藻類の生育種数も量も減少し、「藻場」といってよいような大型海藻類群落はほとんど存在しないことである。

このように博多湾は海藻類にとってはあまり好ましくない環境のようだが、中にはハネモの一種やタマハハキモク、あるいはウラボソのように、むしろ湾内に多数の生育が認められる種もある。博多湾の海藻類については筆者らの研究室で今後も研究を継続していくつもりである。

3. その他

その他の採集地点として、多少福岡市内からは遠くなるが、3箇所挙げておく。

まず、大島。ここは、地図にも示したように、かなり大きな島であり、周囲はほぼ全体が岩礁地帯となっ

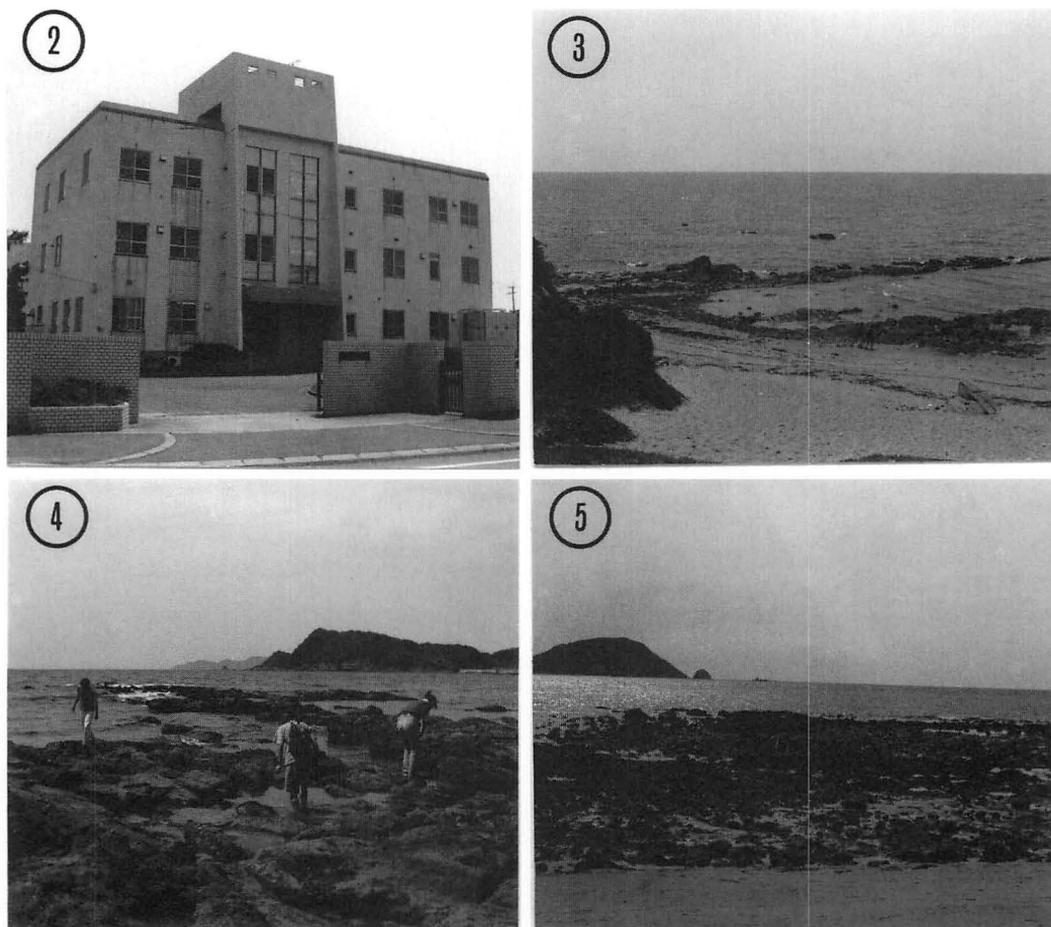


図2. 水産実験所，図3・4. 津屋崎海岸，図5. 勝馬（志賀島北部）

ている。対岸の神湊からフェリーで15分である。フェリーの便数は比較的多いが、島内をまわるバスはないので移動はタクシーが必要となる。海藻植生は津屋崎とほぼ同様だが、津屋崎には出現しない種も若干みられる。

次に、糸島半島の西端にあたる芥屋。糸島半島は全体にわたって転石の磯が多いが、この芥屋は平磯となっていて採集がしやすく、海藻の生育も多い地点である。

最後に、隣の佐賀県で1箇所挙げるとすれば、波戸岬が磯も大きく採集しやすい場所である。ここは海中展望塔もある公園となっていて、休日は家族連れで賑わう所である。

以上、福岡周辺の採集地を紹介した。参考になれば幸いである。尚、水産実験所の利用については、直接実験所への施設利用の申し込みと、九大農学部庶務掛への宿泊利用の申し込みの両方が必要となるので、利用をお考えの方はまず問い合わせることをお勧めする。

九州大学農学部付属水産実験所：宗像郡津屋崎町津屋崎 2506 tel: 0940-52-0163

農学部庶務掛：福岡市東区箱崎6-10-1 tel: 092-642-2802

(九州大学農学部水産学第二教室 〒 812 福岡市東区箱崎 6-10-1)

